ちょうど使い果たされていたという。

●最後の訪問と応対

一月二十五日、小川先生が晩年の日課の一つとなっていた洗濯をして干し終わったところへ、警視庁の田口榮治氏と江本浩之氏がお見舞いに訪れている。

私はそれを聞いてすぐ、田口氏にその日のことを詳しく聞いた。お話を要約すると次のようになる。

「その前、十二月二十日に小川先生はお餅がお好きでしたので、当庁武道館の餅つき大会で出来たお餅を持って、梯（正治）君とお邪魔しました。とてもお元気そうで、楽しそうに話されたんですよ。『佐藤一斉の言志録はいいなあ』『そうですね』。発音がよく聞きとれなかった梯君がおもしろいことを言うもんですから、大笑いしたりして本当に楽しい一刻でした。

帰りがけに、半紙に見事な書がしたためてあるので、『先生、これいいですね。くださいよ』と言ったんです。『じゃ書いてやる』といって書いて下さいました。それには『至人之用心如鏡不將不逆應而不藏』とありました」

ちなみに、この言葉は『荘子―応帝王篇』にあり、「至人の心を用うるは、鏡のごとし。将（送）らず逆（迎）えず、応えて蔵わらず」と読み、意味は「（無為自然、無心であることが大事なの

であって、）それはあの明るい鏡に最もよく例えることができよう。明鏡は、物の去来に任せて自己の主観や恣意に乱されず、去るものは去るに任せて追いかけず、来るものは来るに任せて、ことさら迎えることをしない。（そうなれば、あらゆる事が自由自在に対処することができる）」となろうか。

田口氏の手紙を引用すると、「私は、先生が先生ご自身の境涯を語っているものと受けとめています。失礼ながら、この色紙は、死期を間近に控えた人と思えぬ力強さを感じます。事実、この時は全く筆先が震えず、小生が『先生、今日は震えが全くありませんでしたね』と申しますと、『そうかね』と、大変お喜びになられたことを思い出します」とあった。

また、田口氏の話に戻る。

「一月の中頃でしたかね。伊藤元明先生（医師、小川先生の剣道仲間）から小川先生の体調がすぐれない、と聞いていたので、一月二十五日に今度は江本君と一緒にお邪魔したんです。はじめは『何で来たんだ』と怒ってるんですよ。武人のたしなみで、本当に弱ってきたのを誰にも知られたくなかったのか、それとも他人を煩わさず淡々と逝きたかったのでしょうか。わかりません。

『近くへ来たものですから、つい寄りたくなって』などとごまかして、『お疲れのようですから今日は失礼します。また来ますから』と帰ろうとしたんです。そしたら『ちょっと待て』と言う

んです。

『田口君、形見分けをしたい』と言うので『先生、ちょっと早いんじゃないですか』と書いて示すと、大笑いされましてね。実に楽しそうでした。『Iさんに大変世話になったからこれを届けてくれ』と言って、先生が日頃使っていた毛皮のチョッキを渡されたんです。それを持って帰ろうとしたら、『ちょっと待て』と、また言うんです。

みっちゃん（道子さん）に、いろいろな講演録などをいっぱい持ってこさせ、『田口君、これを心ある人にあなたから渡してくれよ』と言われました。

それで終わらず、『田口君、飯食っていけ。酒はどうだ』と言うんです。『勘弁して下さいよ』と言うと、『最後に頼みがある。警視庁にはいいものが二つある。一つは一刀流、もう一つは直心影流法定の形だ。これを残してくれ』と、頼むように言われたのです。

私の帰り際、先生は涙をこぼされました。私はこの時初めて、先生の涙を見ました。ちょっと涙を拭かせていただいて、お別れしました。これが先生との最後となりました」

●お別れ

翌二十六日は一日熟睡され、この日以降、床から出られることはなかった。

坐禅をやめた頃から、「食べ物は何もいらん」と言われ、二十七日、ヨーグルトを一口おいし

そうに食べたのを最後に食べ物は一切口にせず、水だけしか飲まなかった。伊藤元明先生から「いつでも入院できるよう手配してあります」と言われていたが、その気はなかった。

「今にして思えば、最後の準備をしていたのでしょう。その顔は仏様のようでした」と道子さんは言われる。

奥様も「最後の頃は楽しそうないい顔をしていましたね。そういえば、その頃、『夕べ夢を見たよ。剣道をしていてね、いい面が打てたよ』と言ってました」とおっしゃられた。

亡くなられる二日前、小川先生はご家族を集められ、奥様と五人の子供たち一人ひとりにお別れをした。

「葬儀は質素に家族だけで……兄姉仲良く、お母さんを大切に……」と、短い遺言を残された。

小川先生は、自分で「無得院釈貫道刀耕居士」という戒名も用意しておられた。この日、かかりつけの竹内医師が来られ、栄養補給のため点滴を勧めたが、丁重に断られた。この日から、子供たちが交代でつきっきりで看病をしようということになった。

逝かれる前日（二十八日）、「口をゆすいで着物を着替えるから起こしてくれ」と言われた。奥様と道子さんで起こそうとしたが、先生の身体はとても重かった。困っていると、「どう起こすかが問題だ」と言われたという。二人は懸命に起こそうとしたが、腰を痛めていた奥様と二人ではどうすることもできなかった。結局、起こしきれず、終日布団を背にして黙想しておられた。

半眼で座すお姿は「そのまま幽玄の境に入ったような崇高な姿でした」と道子さんは語っている。この日は、先生のお好きな、燃えるように見事な夕焼けが西の空を染めていたという。

その晩は、お世話のため見えておられたご長女と夜遅くまで楽しそうに過ごされていた、とのことである。

翌平成四年一月二十九日午前十一時五十五分、道人・小川忠太郎先生は眠るように悠々と昇天された。

一月三十日、みぞれの降る中で通夜が行われた。ご焼香の番がまわってきた時、私は、棺の脇に座っておられた森島健男氏と楢崎正彦氏が悲しみをこらえた眼差しで私に対してうなずかれたのを見た途端、涙で何も見えなくなった。小川先生の遺影もかすんでしまい、はるか遠くの夢物語のようであった。

二月一日、大雪に清められながら告別式が挙行された。ちなみに納骨の日も雪に飾られたという。真っ白な雪化粧は、己をまっすぐに貫いて生きた、小川先生にふさわしい舞台だと思った。

通夜にいただいた辞世の歌は、

「我が胸に　剣道理念抱きしめて
　　死にゆく今日ぞ　楽しかりけり」

である。

これは、先生が病床で、「辞世になるかなあ」と言われたものを道子さんが書きとめ、それを奥様が揮毫（きごう）されたものである。

『剣道時代』一九九二年四月号誌上における、小川先生の追悼座談会で、弟子で警視庁の後輩に当たる森島健男氏が「私は、こういう得がたい師匠にめぐり合えたことを、本当に、最高の幸せだと思います」と話しておられる。その言葉に、同席のすべての方々が深くうなずいたということだが、私も心底そう思う。

私は今、小川先生からご教導いただいた、尊い「剣の道　人の道」の教えを受け継ぎ、次代に正しく伝えていくことが、教えをいただいた我々の使命であると覚悟を新たにしている。